

科学的エビデンスに基づく「スポーツの価値」の普及の在り方に関する委員会
(第24期・第5回) 議事要旨

1 日時 令和元年6月18日(火) 10:00~12:00

2 場所 日本学術会議 6-A(1) 会議室

3 出席者: 渡辺 美代子(委員長)、高瀬 堅吉(幹事)、田原 淳子(幹事)、
遠藤 謙、川上 泰雄(ビデオ)、喜連川 優、萩田 紀博(ビデオ)、
美濃 導彦、來田 享子

参考人: 前田 明(鹿屋体育大学)

説明人: 永富 良一(東北大学・ビデオ)

(欠席) 山口 香(副委員長)、井野瀬 久美恵、神尾 陽子、酒折 文武、
田嶋 幸三、福林 徹、山極 壽一

(事務局) 荒木 潤一郎、高橋 雅之、牧野 敬子、中島 和

4 議事要旨

(1) 前回議事要旨の確認

資料に基づき、前回議事要旨の確認を行った。

(2) これまでの議論の確認

渡辺委員長より、資料「スポーツ委員会のこれまでの審議内容とこれから」に基づき、審議の方向、これまでの話題提供と予定、これまでの審議で特筆すべき点、今後のスケジュールが確認された。

(3) 話題提供(前田参考人)

前田参考人より、資料『最先端スポーツデータに関する話題提供』スポーツパフォーマンス研究センターの挑戦」に基づき、話題提供が行われた。要旨は以下の通り。

- ・ 国立大学法人鹿屋体育大学スポーツパフォーマンス研究センターで行われてきた測定と分析について紹介があり、従来型の科学研究のスタイルに限定せず、現場の需要に見合った実践研究の提示の仕方や意義について提案がなされた(有意差に縛られない、少数でも意味のあるものは取り上げて発信)。
- ・ 研究は論文になって初めて科学的エビデンスとして活用できるので、論文化することに価値を置き、そこから画像や動画を通して知識を普及していく方法をとるのが有効である。

本話題提供について意見交換が行われた。要旨は以下の通り。

- ・ 画像や動画の配信によって、アスリートだけでなく、子どもや一般の人々へのスポーツ

指導等、多様な活用が可能である。

- ・ 一般の人が自分の映像とアスリートの映像を比べて、動きの習得を図ることができる。
- ・ 動きを取り出すことの意味について、動きはパフォーマンスと同価ではないが、動きがあってパフォーマンスが出る、現場からは動きを見たいというニーズがある。
- ・ スポーツパフォーマンス研究センターは実際の試合とは異なるという現場の声があるように、測定の限界はたくさんある。本番のアスリートを測定するのはまだ難しい。心理面の影響もある。
- ・ データのリテラシーを備えた人材はまだ少ない。
- ・ スポーツを社会的な活動として捉えることも意識する必要がある。本委員会はスポーツの価値をとらえることを検討しており、正解は一つではないはずだ。人々は自分の答えは何かを探す営みになる。実際、データをとればとるほど、正解は1つではないことがわかってくる。
- ・ スポーツには経験に基づく実践知が多数存在する。それらを研究につなげていくために、現場の研究会を週1回行ない、特任助教を雇用して論文化を手伝うなどしている。

(4) 話題提供 (永富参考人)

永富参考人より、指導者の威圧的な指導とスポーツ傷害について、話題提供がなされた。要旨は以下の通り。

- ・ 宮城スポーツ少年団に加入している選手 (対象 25,000 人の内 5,784 人が有効回答) のスポーツ障害の発生因子について内的要因と外的要因について調査した結果、指導者の威圧的な指導 (暴力と暴言) が選手の心理的要因となり、スポーツ障害を誘発する傾向がみられることが明らかにされた。
 - ・ 指導経験が長いほど、威圧的な指導を行なっている指導者が多くみられた。
- 本話題提供について意見交換が行われた。主な意見の要旨は以下の通り。
- ・ 自分が暴力・暴言を受けた指導者が、それを容認し、繰り返していることが明らかになった。
 - ・ スポーツ障害の発生は、1週間の活動回数や試合の出場頻度とも関係していた。
 - ・ 暴言は社会一般のパワハラやセクハラとも重なり、受け手側の認識なので、ハラスメントの一種と考えていいと思う。
 - ・ 暴力の問題は、世間の関心が高いので、どこかで扱う必要があると思う。

(5) 学術フォーラムについて

高瀬幹事より、資料に基づき学術フォーラム (10月3日開催予定) の案について説明がなされ、引き続き意見交換が行われた。主な意見の要旨は以下の通り。

- ・ 主催は学術会議となり、委員会や分科会もここに含まれる。共催は他の組織が該当する。後援にはスポーツ庁を含める。
- ・ フォーラムで扱う対象はトップアスリートなのか、それとも一般人なのかについて議論

- がなされた。アスリートは放っておいてもデータを集めるが、一般の人に対して何ができるかが重要である。両者をつなぐようなデータの扱いについての報告があるといい。
- ・ 障がい者についても扱うべきだ。時間を確保するために、開始時間を早めることを検討する。
 - ・ 一般のスポーツのイメージがハイパフォーマンスに特化しているので、価値の転換を図るものにすべきだ。
 - ・ トップアスリートを見ることで、人間の身体能力の限界が見えてくる。アスリートも様々な問題を抱えているのが実情だ。
 - ・ トップアスリートのデータは一般人がパフォーマンスを上げるのには役立つ。
 - ・ 日本の学校で実施されている体力テストはコーホート化されていない。
 - ・ フィンランドでは、メディカルレコードに個人のデータが記録されている。
 - ・ 学習データをコーホートすることを考えているが、そこに体育のデータも入れてはどうか。
 - ・ 義足の子どもデータのデータがないので、コスト計算ができないのが現状だ。アメリカでは各病院のデータを協会が収集している。
 - ・ 今回の学術フォーラムの後、社会課題となっているスポーツの暴力に関するシンポジウムと最後の回答内容を広く発信するためのシンポジウムが必要である。

(6) 次回の予定

次回のヒアリングは、障がい者の立場から当事者研究を行なっている熊谷晋一郎氏（東京大学先端科学技術研究センター）及びパラリンピックについての話題提供者を予定している。

以 上